

私たちの幸せな時間

2007(平成19)年5月11日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督=ソン・ヘソン/原作=コン・ジヨン『私たちの幸せな時間』(新潮社刊)/脚本=ジャン・ミンソク/出演=カン・ドンウォン/イ・ナヨン/ユン・ヨジョン/カン・シンイル/ジョン・ヨンスク/ジャン・ヒョンソン/キム・ジヨン/オ・グァンロク(デスペラード配給/2006年韓国映画/124分)

……「早く殺してくれ」と叫ぶ死刑囚の男と、3度のチャレンジに失敗した自殺願望の女を主人公とした、異色の韓流純愛ドラマが登場！ ビョーク主演の名作『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(00年)の向こうを張るような不幸のオンパレードの中、少しずつ始まる心の対話とは……？ それがこの映画最大のポイント！ 苦しく重いテーマだが、イケメンと美女の2人がこれを意外に熱演！ もっとも、現実と大きく乖離した面会の実態や死刑執行の実態には、大いに「異議あり」だが……？



きわめて異色の韓流純愛ドラマが登場！

今、日本のテレビでは韓流純愛ドラマ『春のワルツ』が放映されており、その人気はかつての『冬ソナ』には遠く及ばないものの、まずまず……？ また大阪では、今年初頭から『百万長者の初恋』(06年)、『夏物語』(06年)、『バンジージャンプする』(01年)などの本場韓流純愛映画が公開されたが、韓国映画の流れとしては、『フライ・ダディ』(06年)、『相棒 シティ・オブ・バイオレンス』(06年)、『おまえを逮捕する』(05年)など、全く別の路線を目指している感じがありありと……。

また、『素敵な夜、ボクにください』(07年)でキム・スンウが日本映画に登場したり、『王の男』(05年)のイ・ジュンギが『初雪の恋～ヴァージン・スノー』(07年)で宮崎あおいと共演したり、さまざまな変化球も模索している様子

……？

そんな中、本来であれば本流韓流純愛ドラマの主人公として登場するのが当然と思われる、カン・ドンウォンとイ・ナヨンという若手美男美女が、今回はいかにも異色の韓流純愛ドラマに登場。何が異色かという、その役柄。すなわち、カン・ドンウォン扮するチョン・ユンスは殺人犯として死刑判決を受け、現在死刑囚として服役中の男で、早く殺してくれと願っているだけの不幸な男。

他方、イ・ナヨン扮するムン・ユジョンは3度目の自殺に失敗し、母親（ジョン・ヨンスク）からボロクソに言われている、人生をあきらめきったような、いわく因縁のありそうな女。そんな2人が主人公だから、これまでのような本場の韓流純愛ドラマになるはずはないのは当然……。

不幸のオンパレードー死刑囚の男は……？

『サウンド・オブ・ミュージック』をモチーフとした、ビョーク主演の名作『ダンサー・イン・ザ・ダーク』（00年）は不幸のオンパレードのような映画だったが、この映画の男女2人の主人公も、まさに不幸な星の下に生まれてきた男女のよう……。

映画はまず最初に、大量に血が流れている殺人事件の現場に立ち尽くすユンスの姿を映し出すから、この事件によってユンスが殺人犯とされ、現在死刑囚としてその執行の日を待っている立場であることを明確に示してくれる。

そんなユンスが服役している刑務所に慰問に来ているのが、ユジョンの伯母にあたるシスター・モニカ（ユン・ヨジョン）。シスター・モニカは、かつて歌手であったユジョンが歌っていた『愛国歌』をユンスが聴きたがっているという話を聞き、ユジョンを慰問に同行させることに……。しかしユンスは、シスター・モニカに対しても全く心を開こうとせず、「俺のことは放っておいてくれ」と拒絶反応を示すだけ……。

不幸のオンパレードー自殺志願の女は……？

そんなユンスに対して、今、車のハンドルを握っているユジョンは裕福な家庭の令嬢のようだが、何を思ったか、突然車のダッシュボードの中にあつた大量の

睡眠薬を……。これで死んでしまったのでは物語が成立しなくなるため、その次はベッドに横たわるユジョンを母親が罵っているシーン……。しかし、そんな母親のお説教に対するユジョンの反撃はすごいもので、この母親と娘の関係にはよほどひどい確執があることを暗示するもの……。

また、ユジョンの兄ユチャン（ジャン・ヒョンソン）は検事をしているようだし、母親はピアニストだったらしいから、ユジョンの一族はかなりセレブで、いわば「華麗なる一族」のよう……。したがって、ただ1人ユジョンだけがその中のはみ出し者で、やっかい者……？

伯母さんにあたるシスター・モニカは、4度目の自殺チャレンジの危険があるそんなユジョンを、精神病院で拘束するよりは自分の手元におき、刑務所の慰問活動でもやらせれば、少しは自分が求められていることを自覚するのでは、と思っただけ……。思っただけ……。

現実の法制度の検証は……？

この映画はユンスとユジョンの人間像に焦点をあてたもので、死刑囚の男と毎週その面会に来る自殺志願の女という主人公は、そのために練られた脚本によって設定されたもの。したがって、毎週木曜日の午前10時から午後1時までの面会という設定や、手錠はつけているものの、イ主任（カン・シンイル）立会いの下でのかなり自由な面会の様子を観ていると、弁護士の私にはかなり大きな違和感を覚えざるをえないもの。

また、ユンスの先輩にあたる死刑囚2896（オ・グァンロク）が、いきなり、これからすぐに死刑の執行だということで連れて行かれることにビックリしていると、その数日後にはユンスまでも……。ラストに「この映画は現実の韓国の法制度に正確にマッチするものではありません」という字幕が出るにしても、いきなりこれからすぐに死刑執行だというのはちょっと無茶……？

プレスシートによれば、ホテルの部屋を借りて監督とカン・ドンウォンとイ・ナヨンの3人で、4日間シナリオ作業を行ったとのことだが、やはりちょっと現実離れがひどすぎるのでは……？

ユジョンの母親への恨みの源泉は……？

この映画では、ユンスの不幸さはミエミエだが、なぜ「華麗なる一族」であるユジョンが1人だけこんなに不貞腐れており、とりわけ実の母親に対して嫌悪感を示しているのか、がなかなかわからない。というよりも、それをうまく隠し、観客に小出しにしていくのが、監督とカン・ドンウォンとイ・ナヨンがシナリオづくりを4日間協議したことの成果……？ したがって、ホントはそれを書くとなタバレになってしまうのだが、それを書かなければこの映画の評論は成立しないので、あえて書くことにしたい。

ユジョンのトラウマとなっているある事実とは、ユジョンが15歳の時、「華麗なる一族」中の某人物によって暴行、もっとはっきり言えば強姦されたこと。泣きじゃくりながら、それを母親に訴えたユジョンだったが、そこで「華麗なる一族」の維持に最大の価値をおく母親が示した対応は、「お前にスキがあったからだ」という冷たいもの。そんな価値判断に立った母親は、ユジョンの頬をぶち、「このことは一切他言無用」と宣言したというわけだ。そこで、強姦被害者のユジョンが、加害者である身内の男よりも、娘のせいだと決めつけて事件そのものを隠蔽しようとした母親を一生恨んでやると決心したのもそりゃ仕方ない、と納得できるもの……？ しかして今やユジョンは、高血圧で苦しんでいる母親の血圧をどんどんアップさせるような言動ばかり……？

量的変化から質的变化への分岐点はいつ？ 何によって？

私が学生運動をやっていた時代、マルクス・レーニン主義の学習の1つとして弁証的唯物論の哲学があった。その1つは「量的変化から質的变化へ」というもの。つまり、量的に少しずつ変化していく中、ある時点でそれが質の変化をもたらすということだ。この映画においても、ユンスとユジョンの木曜日毎の面会におけるやりとりは、当初はかなり敵対的なものだった。また、ユジョンにとっては、義務感に駆られた面会だったはず。しかし、それがある時からは……？

弁証的唯物論によれば、物事の動きには必ず一定の法則性があり、無意味なものはない。したがって、このユンスとユジョンの面会も、回数が重なるにつれて

次第にその意味が量的に高まっていき、ある時点で質的に変化するという法則性があったのかも……？

そして現に、少しずつ心を開いていった2人の姿勢によって、ある時点から、木曜日毎の2人の面会は重大な質的变化を遂げることに……。

イ・ナヨンの熱演に思わず涙……

私は『英語完全征服』（03年）を見逃していたため、ユジョンを演じたイ・ナヨンを観るのはこの映画がはじめて。映画前半の自殺願望の女、そして「華麗なる一族」の中でただ1人ハンパ者となっているユジョンの姿を観ていると、多少は、嫌味なわがまま女という印象ももっていた。また、自殺したいならさっさとやっしまえよと思ったし、半分義務的に刑務所へ面会に通う姿も、中途半端に思えたもの。しかし、しかし……？

いつの頃からか、ユジョンにとって木曜日毎にユンスと面会することは、何よりも優先すべき自分の価値となっていた。やっと自分の生きる意味を見出したユジョンに突きつけられた現実が、ユンスの突然の死刑執行。そんな時、ユジョンが入院先の母親の部屋を訪れ、美しい顔をくしゃくしゃにしながら、「私はあなたを赦す。そうすれば奇蹟が起きるかもしれないと思うから……」と必死にアピールする姿はホントに感動的。韓国の若手美人女優のしっかりとした演技力に感心するとともに、思わず涙が……。

韓国はキリスト教の国……？

無神、多宗教、雑宗教の国である日本で意外と知られていないのは、韓国はキリスト教の国だということ……？ そここまで言うと言いすぎだが、ネット情報によれば、韓国では約53%を占める宗教人口のうち、プロテスタントとカトリックを合わせるとキリスト教信者が25.6%となり、仏教の26.3%とほぼ同じ。

否応なく死刑執行と向き合わざるをえない死刑囚にとって、いかに安らかな死を迎えるかが最大のテーマだから、若い時からのキリスト教信者はもちろん、死刑囚とされた後にキリスト教信者になる人も多いはず……？ ユンスの先輩の死刑囚2896がその典型のようで、彼はキリスト教に帰依することによって、何とか

安らかな死を迎えたいと努力していたが……。『早く殺してくれ』、そればかりを願っていたユンスは、もちろんキリスト教信者ではなかったが、ユジョンとの面会によって次第に心を開いていく中、ある日遂にキリスト教信者となることに……。しかして、死刑執行の際のユンスの心の安らぎは……？ そんなことを考えるについては、日本の死刑執行の現場における宗教的対応と、韓国のそれを対比するのも1つの視点……？

原作は？ 監督は？ 脚本は？

この映画の原作は、韓国で若い女性に根強く支持される人気作家コン・ジョンの『私たちの幸せな時間』で、日本では5月に発売予定とされている。プレスシートによれば、2005年4月、日本に向かう空港で偶然その原作を読んだソン・ヘソン監督は、読み終えた後「神がくれた贈り物だ」と思い、映画化の企画が進んでいったとのこと。

このソン・ヘソン監督は『力道山』(04年)で、英雄としての力道山ではなく、孤独で常に自分と闘っている1人の男としての力道山を描いたように、「いつも人間に関する物語」を描くのがその特徴……？ もっとも、前述のようにこの映画のシナリオづくりについては監督とカン・ドンウォンとイ・ナヨンとの3人がかなりの作業を行っているようだから、脚本のジャン・ミンソクを含めて、原作がどの程度生きているのかはよくわからない。したがって、この映画については、ホントは原作を読み、映画と比較・対照をしてみたいものだが……。

2007(平成19)年5月12日記